
ナックル 最強の小学生(仮)

ダブルエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナツクル 最強の小学生（仮）

【Nコード】

N5151R

【作者名】

ダブルエース

【あらすじ】

主人公鬼頭拳、通称オニケンは毎日嫌な気持ちで小学校にかよっていた

それは幼馴染の虎谷公平に対する劣等感から来る物だった

その気持ちを表には出さず、毎日それなりの日々を送る拳だったが、ある日の出来事をきっかけに二人の関係は変化していく

アクセスありがとうございます

初めて書く小説です

つたない文章ですが、楽しんでもらえたらうれしいです

序章

2人の少年が向かい合って立っている

「んじゃ、いくぞ龍吾」

背の低い方の少年が軽くステップを踏みはじめる

もう一人の2周りは体格のいい少年がゆっくりと拳をあげ大きくかまえる

少しずつ縮まる2人の距離

そして

2つの拳が交差する！！

ナックル 拳序章

朝日が昇る

自転車に乗って新聞を配る青年

犬の散歩をしている老人

朝食を作る主婦

街が少しずつ動き始めようとしている頃

民家から少し離れた山奥の草原に3人の少年がいる

「おい、そろそろやめねーと遅れちまうぞ」

「分かってるって、あと5分だけ」

「ったく、ゝ、」

座り込んだ少年があきれた顔でため息を吐く

「んじゃいくぞ龍吾!!」

小柄で元気の良さそうな少年が叫ぶ

向かい合っている体の大きな少年は、やれやれといった表情

3人とも汗だくで、拳には布のようなものが巻かれていた

傍らにランドセルがみつつ置いてある

朝露をすった草の匂いに包まれた草原の中、小鳥のさえずりが聞こえる

いまから新しい1日が始まろうとしていた

30分後―

「あー、もう完全に遅刻だ」

「ハアハア、もう走る気すら起きねえ」

「ハア、だから早くやめろっていったろ！ゼエゼエ」

ランドセルをかついだ少年達だ

相当走ってきたらしく、3人とも息を切らしている

「昨日も、一昨日も遅刻したからな、担任、今日はかなりおつかねえぞ」

「あっはっは、まじやべえな、シャレになんねえ」

「あっはっはじゃねえっつーの！拳、お前のせいだろうが」

しっかりした感じの少年が小さい少年に怒っている

「ハハッ、まー公平、そんなに怒んなよ、いいじゃねーか」

「龍吾、お前がそうやって甘やかすから拳が調子にのんだよ」

頭一つ分以上大きな少年がなだめている

小さな少年がからかった声でいう

「公平、そんなに怒んなよ、寿命ちじむぞ」

「だからお前のせいだろうが！」

「いいじゃん公平、お前ぐらい成績よかったら、少しくらい授業遅れたって変わるねーだろ」

「龍吾、お前まで、、、でもまあ、、、、、、、、たしかにどうでもいいわな授業なんて」

「へへっ」

「ハハハッ」

3人とも笑顔である

「よしじゃあこのままさぼって朝定食いに行こや」

「いいねー、マジ腹へったわ」

「龍吾んちで、あんなに朝飯食ったのにな、成長期ってマジこえーわ」

「お前は小さすぎだろ、あんなに食ってんのに」

みんな爆笑していた

「んじゃ、行くべ！」

さっきの疲れなんかなかったように3人は走りだした

少年達の目には一点の曇りもなかった

序章

完

第1話 『拳と公平』

オレは気付いちまった

いや、本当はずっと前から気付いてたんだ、ただ、、、、

認めたくなかったんだと思う

拳 ナックル 第1話

ジリリリリ

目覚ましが鳴る

うーん、もう7時か

朝が辛いと思い出したのは、ここ一年くらいだ

何となく布団から出たくなかったけど無理やり体を起こした

あー昨日時間割しねーで寝ちまったな

だりー

投げやりでランドセルに適当に教科書を詰め込んだ

隣の部屋の戸を開けてみたら、なんとも言えない酸っぱい匂いがする

反射的に鼻をつなみながらよく見てみると、母ちゃんがビールの缶に埋もれながら、死んだように寝てた

3日ぶりに見るおふくろは相変わらず疲れた顔をしている

オレは起こさないように、そっと戸を閉めた

何か腹に入れようと思って、台所に行くと、テーブルの上に5千円と、給食費の入った袋が置いてあった

二枚残ってた食パンをかじりながら、あ、どうでもいいけど、俺はガチで食パンが嫌いだ、特に耳が

中を覗いくと9000円と紙切れが入ってた、

紙切れには

2ヶ月分です

滞納して申し訳ありません
って書いてあった

漢字はあんま読めなかったけど、何となく意味はわかった

そっか、昨日母子手当てが出た日か

5千円あったら、晩飯は1週間ぶりに玉子と米と安い肉だったら食えるな、うん、流石に食パンばっかで辛らかったしな、うん

久しぶりに気分が良くなっていると、俺の部屋からゴソゴソと弟の光輝が出てきた

「兄ちゃん、おはよう」

「どうしたこんな時間に、今日病院だろ？もっと寝てろよ」

「うん、なんか目が覚めちゃった」

残ったパンを光輝に食わしてから学校に行く準備をする

するといつものように、オレの後をずっとついてきた

「なあ兄ちゃん、昨日何したん？」

「兄ちゃん、今日の晩ご飯なに？」

「なあ、昨日ボクお絵描きしたん、兄ちゃんかいたんだよ」

「なあ、兄ちゃん」

「なあ、なあ」

、正直鬱陶しい

「うるせえ！！いつまで着いてくんだよ！遅刻しちまうだろーが！」
うんとか、ああとか適当にあしらっていたけど、オレが学校に行く時間になってもずっと付きまとってきたから、ついカツとなった

「、、ごめん、兄ちゃん、、」

あーあ、いじけた

「男のくせにうじうじしやがって、うっとーしい」

「ヒツ、ヒツク、、ぐすん」

うわ、もう泣きやがった

あんまり光輝にばっかかまってたらイラつくから、ほっというて学校行くことにした

少し咳をしてたから気になったけど、そのうち母ちゃんが起きて、病院に連れてくだろう

はやく公平ん家に行かねーと

「よお、拳ちゃん」

アパートを出ると、ボロボロの服を着たおっさんが、にやにやしな
がら近付いて来る

何とも言えねー香ばしい匂いが、辺り一面に漂う

「今日も何も食いもんねーよ」

そう言うと、悲しそうな顔をしてとぼとぼと戻っていった

この辺りに漂う貧乏臭い異臭、それを何十倍も濃くしたような強烈
な匂いのする、ホームレスのおっさん

近所に何人もいるこの人達が小汚くて弱いこの町を象徴しているよ
うに思えて、ヘドがでそうだった

おっさんから10メートル以上離れて、やっと止めていた息を吸っ
て、道路にツバを吐いた

ただ雨や風をしのいで寝るためだけの、ボロボロの集合住宅が建て
並ぶ、糞みてーな町、オレはこの町が大嫌いだった

はやく公平ん家に行かねーと

近道するために、しかたなくホームレスの巣になっている空き地を抜ける

途中、10円ババアと歯抜けのおっさんが絡んできたけど、無視した空き地を抜けしばらくすると、辺りが急に変わってくる、集合住宅は減り、歩いている人は小綺麗になっていく

小さなトンネルをぬけ、小さな橋を渡り、さらにすすむ

だんだんガレージがあるピカピカのでっかい家が増えて、止めてある車は高級車ばかりになってくる

ここまで来ると、いやな匂いは全然しない

ウチから、1キロ位しか離れていねーのに、まるで別世界だ

親父が生きてた頃は、オレもここに住んでたんだ

オレが、昔すんでた家の二軒隣のばかでかい家が、公平ん家だ

チャイムを押すと、すぐ公平が出てきた

「おせーよ、拳！」

「ごめん、光輝がぐずってさ」

公平はちよつとムツとした顔したけど、すぐにランドセルをからったよかった、今日はそんなに機嫌悪くない

公平はあんま寝起きがよくない

朝のこの時間が1日で一番嫌いだ

いつも、眠そうにいらついている公平をなだめながら、学校に行く

横に並ぶと、公平はオレより頭一つ分はでかい

こう聞くと公平が特別大きいみたいだけど、そうじゃなくて、、

整列の時、1年の時からずっと、一番前が定位置の自分の身長が嫌になる

前は公平が迎えに来ることもあったが、最近は毎日オレが公平ん家にいって

学校と反対方向の公平の家に毎日わざわざ通うのは理由があった

小学校の近くのコンビニで、奈良と鈴岡に合流して一緒に登校した

2人とも四年生から同じクラスになった

奈良は体が小学生にしてはかなり大きく70キロ近くあって、隣街の柔道場に通っている

平たくゆーとデブだ、そしてメガネだ

鈴岡は、公平と同じ中肉中背の筋肉質で、公平と同じサッカー少年団に入っている

少し天パでたれ目だ

実は俺も2年の終わりまで入ってたんだけど、光輝の体が悪くなったのもあって、親父がいなくなってしばらくして辞めた

2人とも最近毎朝オレたちを待ってる、正確に言うと、オレじゃなくって公平を、、

いつもの様に、4年2組の教室に着く

オレたちが着いた瞬間、昨日のテレビの話や、携帯をいじったりしていたクラスメイトの空気が変わるのがわかった

席に着いて、朝礼が始まるまでの時間、奈良がコンビニで買って来たジャンプをみんなで読みながら過ごす

オレはまだ読みおわってなかったページを、真ん中に座っている公平がめくった

今日、日直だった鈴岡が黒板を消し終えた頃、担任が来た

「起立、礼、着席」

学級委員の公平がいつものように号令を出して1日がスタートする
このクラスは公平を中心に回っていた

実際、公平はすごかった

教育ママの母親の期待に応え、成績は常に上位だったし、サッカークラブでは4年生で、2人しかいないレギュラーだった

ずっと学級委員で教師のウケもよく、上級生にも顔が利いた

そして何より、強かった

2ヶ月前、四年生になって1週間たったころ、回りからけしかけら

れた奈良が公平をからかった

3年までクラスが違った奈良は、柔道をならってる自分の方が強い
と思ってたんだろう

多分回りもそう思ってたはずだ

奈良は、前のクラスでも幅をきかして嫌われていたし、人気があった
公平が気に入らなかったんだと思う

自信満々の表情で挑発するメガネデブを、公平はいつもどおりク
ルにあしらった

逆上してとびかかるメガネ豚

奈良の見せ場は、最初の一発だけだった

軽くステップをふんだ公平の余力たっぷりのローキックが、銀縁チ
ャーシューのスネに入った瞬間、勝負はついた

予想以上の衝撃に顔を引きつらせた奈良を、公平は冷静になだめた
多分、すでに何人かの取り巻きがいた奈良の顔をつぶさないためだ
ったんだと思う

びびって心が折れかけていた奈良は簡単に公平に呑まれた

お互いの実力をほとんどださないまま、奈良と公平の勝負は終わった

次の日、あっさりと公平に乗り換えた奈良の取り巻きの姿が、公平をこのクラスのリーダーと認めたことを示していた

こうしてこの学年に公平に逆らうやつは1人もいなくなった

授業中、公平が発表するとみんな驚きの声をあげる

休み時間、公平が笑うとみんな笑う

三限目の体育のバスケ、公平が得点すると、女子は黄色い声を出す

みんな公平が好きだったし、みんな公平にあこがれてた

そして、だれも公平に逆らえなかった

三限目の休み時間、公平達と鈴岡はケータイをいじってた

携帯を持っていないオレは他の連れとしゃべってすごした

携帯電話

こいつを持っていないことがオレが毎日公平を迎えにくい理由の一つだ

オレらのクラスでは、ケータイを持っている奴と持っていないやつが半々位だ

それはケータイをいじっている間、クラスの半分の輪に入れないことを意味していた

四年生になった公平がケータイを買ってもらって、他の連れと絡みだしてからだんだん気付いてきた

チビで足が速いだけが取り柄のオレに友達が多いのは、オレが公平と幼なじみだからって事に

オレと同じ位背が低い、古林君みたいに軽く扱われないのは、オレが公平と仲がいいからって事に

オレと同じ位家が貧乏で、ケータイもプレステもDSも持っていない小島みたいに、なめられないのは、オレが公平と一緒にいるからって事に

オレは気付いちまった

いや、本当はずっと前から気付いてたんだ、ただ、、、

認めたくなかったんだと思う

幼稚園の頃からの幼なじみの公平の、

毎日一緒に遊んだ親友の公平の、

家族ぐるみの付き合いがあった兄弟同然の公平の、、、

顔色見て、ご機嫌をとりながら毎日生活していたって事に

オレは、

オレは、、、

オレは、、、公平が怖い

昼休みみんなバスケしようって言ったけど、公平がサッカーしたい
って言ったからサッカーをした

放課後、いつもの様に公平を家に送ってから、オレは大嫌いなアパートに帰った

黄金色に光る夕日が、やけにまぶしかった

第一話 完

第2話 『転校生』

連日の雨が久しぶりにあがり、特有の湿気を含んだ空気が、やがてくる夏の始まりを期待させるそんな6月の終わりの事だった

オレにとって一生忘れられない夏が始まる

拳 ナツクル 第二話

最近、公平の様子がおかしい気がする

その日は、特に機嫌が悪かった

朝、オレが迎えに行った時から、ほとんどしゃべらないで、何か考え事をしている感じだった

奈良や鈴岡や、毎日のように増えてくる、とりまき連中と合流してからは、態度には出さずに笑顔だったけど無理している様に思えた

何となく心配だったけど、学校に着いてしばらくしたら忘れてしまった

いつもと同じように毎日が始まる

「起立、礼、着席」

公平が朝の号令をかけると担任が話しはじめた

「おはようございます 今日の後から、うちのクラスに転校生が来ることになった、一学期も残り少ないが、みんな仲良くするように」

その後、五分間担任はいつもの様に、淡々と喋って職員室に戻っていった

この辺は工場地帯だから、この時期に転校生が来るのは別に珍しい事じゃない

「なあオニケン転校生、男だと思う？女かな？」

奈良が話し掛けてきた

オニケンってのはオレのあだ名で、名字が鬼頭だから

鬼頭 キトウケン 拳でオニケン

同じクラスに和田健作ってやつがいたから四年生からの連れにはそう呼ばれてた

とーぜん和田は、ワダケンって呼ばれてる

公平の連れのオレは、小学生にありがちな亀頭なんて下ネタでからかわれることはなかった

「さあ、女じゃね？うちのクラス男のが多いし、何で？」

奈良が珍しく真顔でいう

「男だったら給食の取り分が減るだろ？」

「おい、おい、そんな事かよ、、食い意地張ってんなあ」

「お前がゆーな！昨日シチュー8杯も食いやがって、お前のせいでオレが毎日足りねーんだよ」

「うっせー、オレは成長期なんだよ」

「の割りには全然身長伸びねーな、あ？」

「てめーこそ、少しはダイエットしたらどうよ？それに少なくともオレはお前より食ってねーよ」

「んだと、てめー！」

「やんのかコラ！」

醜いののしりあいが始まる

奈良とのおかわり競争は毎日熾烈を極めた

連日更新される大食い記録は、遂にクラスの残飯ゼロの偉業を成し遂げた、これは全学年でオレらのクラスだけらしい

最近では欠席者の分だけじゃなく、小食の女子や、面白がった男子からもらったパンが、オレと奈良の食器に山のようにもられている事から、オレたちの給食はピラミッドの儀式と呼ばれている

ちなみに昨日の献立は、コッペパンとビーフシチュー、サラダ、牛乳だった

俺がシチューを8杯、奈良が6杯食った所でシチューは完食した

ただ俺と奈良の間の席に置かれたピラミッドパンは、俺が4個で奈

良が11個くったから、やっぱあいつのほうが食ってると思う

てかオレ、あんまパン好きくねーし

まーオレのが、牛乳たくさん飲んだけどな、身長伸ばすために頑張
って、頑張って

、、まあそんなこんなでオレと奈良でクラスの給食の過半数を平
らげてたんだけど、実は2人とも全くたりてなかった

カーネルサンダースを子供にしたみたいなメガネデブはともかく、
最近給食以外ろくなもん食えないオレにとってはこれ以上量が減る
のは死活問題だ

いや、冗談抜きで

「まーでも、まじで食料を供給してくれる女の子だいいな、豚足」

「ああ、これ以上分け前が減ると隣のクラスの余りにも手を付けな
いといけなく
なるよな、ミジンコ」

隣のクラスからの食料強奪作戦を本気で話し合っていると笑い声が
聞こえてきた

「クスクス、、」

「?」

「?」

「アハハハッ、」

「公平!？」

驚くオレと奈良

「あー腹いてえ、おまえら真面目な顔して何いい争ってるかと思ったら、給食の話かよ」

公平につられてクラス中が笑う

オレと奈良も苦笑いする

「心配すんな、男子だったとしてもさすがにお前らみたいに食う奴はなかないねーから、今と変わんねーよ」

鈴岡がそういうと、公平はさらになんかつぼったらしく、悶絶していた

公平のこんな楽しそうな顔は久しぶりに見た気がする、なんか嬉しかった

今日の給食はカレーだったんだけど、みんな気を使ってくれたのかいつもよりおかわりできる量が多かった気がした

公平がオレと奈良を煽ってきたから、みんな面白がってたただけかも知れないけど

オレが5杯、デブが6杯、何人かの男子が2、3杯ずつ食べて、10分後にはいつものようにおかわりは完売した

クソ今日も負けた

昼休みは公平がサッカーしたいっていうから、運動場に出た

すでに何人かの上級生が遊んでいたが、公平達の姿を見ると、いつものようにほとんど貸し切り状態になった

チーム分けして、始めようかって時に、放送がかかった

「四年二組の虎谷^{こたに}君、職員室まで来て下さい」

虎谷ってのは公平の名字

優等生の公平が職員室に呼ばれるのは珍しかったから、みんな驚いた顔したけど、学級委員の話じゃねーかってことで、納得して公平抜きで始める事にした

午後の授業が始まる前、公平がまだ戻ってきてなかったから、気になつてると担任が入ってきた

「みんな、朝言っていた、転校生を紹介する」

鈴岡が

「せんせー、公平は？」

って聞くと

担任は

「虎谷は家の事情で今日は帰つた」
っていった

少しクラスが動揺したけど、みんなの興味はすぐに転校生に移った
担任が廊下に出て転校生を連れて入ってくると、騒がしかったクラスがシーンとなった

「福岡からきた前田龍吾君だ、仲良くするように」

担任が転校生の紹介をしたけど、多分みんなほとんど聞こえて無かつたと思う

みんな転校生を見て呆然としていた

別に特別変わった顔や髪型をしていたわけじゃない

髪は坊主より少し長い位の黒で、顔は不細工でも、公平みたいに整っている訳でもなく、男らしい顔付き、まあ普通だ

みんなが驚いた理由

何ていうか、そいつは、、

ぶっちゃけ

普通よりかなり

でかいんだ

いや、マジで、、

一瞬大人が入ってきたと錯覚してしまった

でかさだけだったらこのクラスにはヘビー級小学生の奈良がいる

奈良と体重はあんまり変わらないように見えたが、肉体の持つ威圧感みたいな物が圧倒的に違ってた

何食ったらこんな身体になるんか

担任とほとんど変わらない身長

170センチ近くはあるように見えた

決してデブじゃないが、縦も横も同級生とは比べものにならなかった

「でけえ」

「すげえ」

クラスメイトから声にならない、声があがる

だれか空気の読めないやつが

「おい、おい、明日から奈良とオニケンの給食たりねーんじゃねーの？」

ってからかったけど、もちろん誰もつつこまず、微妙な空気が流れた

そいつは担任に自己紹介をすすめられると、

「福岡からきた前田龍吾です。よろしく」

とだけ言って軽く頭を下げた

別に愛想が悪いわけでも無かったが、どこか違和感があった

「悪いな、急な転校だったんで席の用意が出来てなくてな、とりあえず虎谷の席に座ってってくれ」

担任が公平の席に座るように言うと、真ん中の列のやつはみんな避

けるように、軽く身体を横にのけぞらせた

普通に歩いて、普通に席に座っただけなのに、明らかに普通じゃないでかい肉体が動くっただけで強烈なインパクトがあるってことを初めて知った

5限目の間中、オレを含めみんながちらちらとそいつを覗き見るのがわかった

休み時間、オレは奈良や鈴岡たちと普通に喋っていたけれど、みんなそいつを意識しているのは明らかだった

そいつは教科書を見せてもらっていた隣の席の古林君と喋っていたこっそり聞き耳をたてると、前の学校で何のテレビが流行っていたとか、まー普通の話だった

6限目の途中で、オレはあることに気が付いた

そいつが普通の転校生と、違って見える理由

身体がでかいだけじゃなくて、、

そいつは転校生特有の緊張感とか、よそよそしさみたいなものが普通より少ない気がした

要するに堂々としていたんだ

これだけの体格だ

多分こいつは、前の学校で一度もなめられた事やバカにされた事がないんだろう

いや、今までまともにケンカを売られた事すら無いのかも知れない

そいつには自分に自信がある奴だけがもつ独特の雰囲気があった

オレはこういう雰囲気のを1人知っている

公平だ

種類は違うけど、公平のもつ余裕みたいな物がこいつにもあった

奈良も鈴岡もそのことに多分気付いていたと思う

6限目が終わり、女子の副委員の朝倉が馴れない声で終礼をかけ、そいつの転校初日は普通に終わった

サッカー少年団の日だったので鈴岡は学校に残り、奈良と何人と一緒に帰ったが、転校生の話題には誰も触れなかった

みんな明らかにびびっていた

駄菓子屋に誘われたが、小遣いに余裕がなかったし、保育園に迎えに行かないと行けなかったから断って、スーパーで夕飯の買い物をしてからアパートに帰った

梅雨の香りがかすかに残る6月の終わりの1日だった

第二話 完

第3話 『悲しい知らせ』

あいつさえやって来なかったら何も変わらなかったんだ

毎日、普通に学校に行って

毎日、公平達とそれなりに楽しく

普通の毎日を送っていったはずだった

たどえそれが見せかけの楽しさだったとしても

拳 ナツクル 第三話

「あー、頭痛い」

朝、適当に目玉焼きを焼いて、味噌汁を作っていると珍しく母ちゃん起きてきた

「まーた二日酔いか？強くねーんだから無理すんなよ」

「ブーツ、しょーがないでしょ、仕事なんだから」

お袋は夜スナックで働いている

前は昼間も仕事をしていたけど、光輝の体調が悪くなってから病院に通うため、夜だけになった

「うーきもちわりー、拳、お水ちょーだい」

「つたく、そんなにきついんなら帰って来てからビール飲むなよ」

「もー拳ちゃん、朝からそんなに怒らないでよ」

お袋が水を飲みながらふてくされた顔をする

まったくどっちが子供かわかんねー

「なあ母ちゃん、そー言えば、この間の光輝の検査どーだった？」

オレがそー聞くと、お袋は何も答えなかったので、オレもそれ以上何も聞かないことにした

アパートを出ていつものように、公平を迎えに行くと、公平の母ちゃんが出てきて、先に学校に行くように言われる

昨日の朝も会ったのに、いつもきれいな公平の母ちゃんは何でか老けてみえた

何か変だと思ったけど、仕方ないから1人で学校に行った

学校に着くと、もう転校生が来ていて公平の席に座ってた

なんかそいつの分だけ机と椅子が妙に小さい気がした、そんな訳ねーけど

しばらくすると、担任がきて、公平がいないことに気付いた副委員の朝倉があわてて号令を出す

「おはようございます」

いつものように担任が話します

「実はみんなに悲しいお知らせがある、、、昨日虎谷のお父さんが交通事故で亡くなりました」

、、、？

はっ？

おい、ちょっと待てよ、、、

ざわつくクラスメイト

なに言ってるんだ？

オレは、冗談だと思った

先月見たおじちゃんは元気そうだった

だけど現に、公平が学校に来てない

「みんな静かに、虎谷は数日休む、その間大変だと思うが、朝倉を中心にやっていってくれ、それから虎谷が戻って来たら励ましてやってくれ」

教室はまだ落ち着いてなかったけど、担任は話しを終えるとオレを廊下呼び出した

「なあ先生！事故って何だよ！おじちゃんマジで死んじゃったのかよ！！！」

オレが興奮して聞くと担任は改まった顔で

「みんなの手前、事故だといったが、実は、自殺だったらしい、、、まだ虎谷から聞いてなかったか？」

オレは首を振った

「そうか、一番仲のいいお前にも言っていないって事は、よっぽどシ
ョックだったんだろうな、みんなには自殺の事は黙っておいてくれ」
オレは呆然としてたけど、担任と放課後一緒に通夜に行く約束をし
て、教室に戻った

自殺、、、

公平の父ちゃんはそんな事する人には見えなかった

しょっちゅう遊びに連れていってもらったし、光輝が入院した時は、
公平と一緒に見舞いに来てもらったこともあった

席に座って、おじちゃんの事を考えていると、鈴岡が話し掛けてきた

「公平最近、様子おかしかったし、何かあったのかもな」

交通事故としか聞かされてなかったはずの鈴岡の言葉にドキツとし
たけど、担任との約束があったから、普通に会話を合わせた

「公平の親父さん、自分も昔サッカーやってたから、公平がレギユ
ラーになる前からよく試合見にきてたじゃん、土日とかコーチの代

わりに練習教えてくれることもあったしさ」

そういえば、前は家の前でよく公平と一緒に練習してたな、オレも一緒に

「それが去年から公平がレギュラーになったのに、この一年位あんまり顔みてなくてさ」

鈴岡は、公平とは違った意味で冷静というか、分析力があって少し大人びた所があった

「ただ仕事が忙しかったただじゃねえ？」

公平の父ちゃんは、小さな工場の二代目社長をやってたから、きつと仕事がうまくいってなかったんだろうって漠然と思った

午前中はいつもよりごたついてたクラスも徐々に落ち着いていく
三限目の休み時間、転校生は、少し仲良くなったクラスの比較的大人しい奴らと話していた

リーダーがいないオレたちは、いつものように集まってたけど、何となく普段より肩身が狭かった

今日の給食は、オレは公平の父ちゃんの件もあって、なんかいつもより食欲がなくて、一回お代わりをしたけど、半分残してしまった
奈良も今日は、二回しかお代わりしなかった

転校生も空気を読んだようで、でけー図体に似合わず一回お代わりしただけだった

昼休み、なんとなく外で遊ぶテンションじゃなかったオレたちは教室でダベって過ごした

公平のおじちゃんの話はさけて、担任の後頭部の話や、今後の海賊マンガの展開なんかを話したけどいまいち盛り上がらなかった

あ、ホントにどーでもいい話したが、オレらが先生の事を担任って言うのは、実はあだ名だ

四年生の始業式に

「今日から皆さんの担任になる担任の黒沢だ、担任をするのは、久しぶりだが、いい担任に慣れるよう努力する、ちなみに去年三組の担任だった、山田先生が副担任をして下さる、担任、副担任力をあわせていいクラスにしたい」

と、結局考えたんであろう長いセリフをやや噛みながら言う公平がぼそっと、

「何回担任って言ってんだよ、ってか今日から担任になる担任の黒沢先生噛みすぎじゃね？」

って小声でオレに言って、大して面白い話でもないのに、なぜかツボったオレが爆笑して、なぜかオレだけ怒られた

まーこんなどーでもいいエピソードで黒沢先生のあだ名は担任になったけど、本人は気付いてない、ホントどーでもいいな、、、

転校生はクラスの草食動物達と携帯をいじってた

なんだこいつ携帯持ってんのかと思うと、何か氣にくわなかった

居心地の悪い肩身の狭さに痺れを切らした公平の取り巻きたちが、奈良と鈴岡に何かを訴えるような目で見る

以外にも、いつも好戦的な奈良が首を振ってやり合う意志が無いことを伝えるとなんとなくしらけた空気が流れる

後に、奈良は公平との一戦から、慎重に機をうかがう事を学んできた、かっこいい事だったけど、きっとビビッていただけだと思ふ、こいつはそーいうやつだ

うまく鈴岡がまとめようとしたけど、普段公平に頼りきっているオ

レたちには、統率力が足りず、しばらくして取り巻きの内2人が、転校生と絡んでいる3人の中の、一番弱そうな奴をからかいに行った

突然の事態にチワワのようにパニくる草食ポケモン古林君、お気の毒に

転校生は何も言わず、ただその様子を見ているだけだった

鬼の首でもとったかのような顔で戻ってくる取り巻きコンビ

そのやり取りを見て、オレも何だ、普通に大人しい奴なのかもしれないなと思った

興味本位で遠巻きに見ていた何人かの女子も何も起こらず、がっかりした様子

昼休みが終わりって、五時間目の休み時間、再び因縁を付けに行く取り巻きコンビ、その表情は時代劇に出てくる越後屋と悪代官のようだった

公平のいない間に、グループ内の権力を上げようと必死なんだな、きつと

転校生は、やっぱ見てるだけで、何もいつて来なかったがオレたち

の方を少し見るとうつすらと笑ったように見えた

その瞬間、オレは何か威圧感のような物を感じた

「やっぱ、あいつただのみかけだおしのビビりだぜ」

戻って来た極悪コンビが自信満々にいう

結局、今日はそれ以上何も起こらなかった

放課後、担任と合流するため校門の前で時間を潰す

鈴岡も一緒に行かないか誘ったけど、まだ公平も落ち込んでいるだろうし、急に大勢で行っても迷惑だろうから、今日はやめてサッカークラブのやつらと明後日顔を出すって言われた

本当に気の回るやつだ

とても小4とは思えねー

5分位待っていると、副委員長長の朝倉がやって来た

「あれ、拳君も一緒なんだ、そっか、、、そうだよね」

クラスの代表として朝倉も一緒にいくらしい

副委員の朝倉とは、公平と一緒に何度か話したことはあったが2人だけで話すのはこれが初めてだった

オレと仲のいい何人かの女子は、みんなオニケンか拳って呼び捨てだから、拳君って呼ばれるのは違和感があって、ちよつと恥ずかしい

「公平君のお父さん、、、残念だよね」

朝倉は下を向きながら話した

「ああ、おじちゃんいい人だったからな」

「私、公平君に何て言ったらいいか分かんないよ、」

それはオレも一緒だった

それに、、、まだおじちゃんが死んだなんて全然実感がわかないんだよな、、、

「もし私のお父さんが死んじゃったらと思うと私、、、あつ、、、ごめん」

朝倉は上目遣いで、申し訳無さそうな顔でオレを見た

えっ？、

ああ、オレの親父のことか

「いいよ、昔の事だし、気にすんなって、今は公平も落ち込んでるだろうけど、オレでも乗り越えたんだ、あいつは強いし大丈夫」

「、、、そうだね」

少し風邪が吹き、朝倉は長めの髪を押さえ付けた

なぜか見とれてしまう、オレ

朝倉は授業中はメガネをかけているので、初めてまともに顔を見た気がする

「でも2人ともすごいよね」

「えっ？なにが」

一瞬どきつとした

「本当に強いんだなと思って、私ならきつと耐えられないもん、何か号令すらまともにかけられないし」

「号令？何で？」

朝倉は後ろで手を組むと、ちょっと沈んだ声で言った

「苦手なんだ、人前に出たり、みんなをまとめたりするの」

「?、じゃーなんで副委員なんかやってんだよ?」

「他にやりたいって人いなかったし、それに公平君がいたから」

「ん、公平?」

急に顔が赤くなる朝倉

「あつ、別にそういう意味じゃないよ、ホントに、そうじゃなくて公平君すごく頼りになるし、公平君とだったら楽っていうか、私でも出来るかなって思ってた、

あー、でも消極的な自分を変えたいって言うのもあって、公平君と一緒にだったら何か変わるかなーって思ってた、あー、なに言ってるんだろ私」

テンパりながら必死に話す朝倉

普段まじめで大人しい副委員長の、意外にかわいい一面を見て、何か嬉しかったけど少しがっかりした

なるほどね

やっぱ公平はもてるな

「公平はともかく、オレは全然強くねえよ」

毎日、実は公平にびびってるオレが強いわけない

「そんな事ないよ、拳君、あんなに体が大きい奈良君の事、恐がらないで口ゲンカしてるし」

それはノリっていうか、絡みっていうか、別に本気でケンカしてる訳じゃねーのよ、デブが本気になったら瞬殺でやられるよ、オレは、

「それに毎日元気いっぱいだし、すっごくよく食べるし、いつも楽しそうで私、なんかうらやましいもん、それに女の子に人気あるしね」

えっ？

焦るオレ

「女の子に人気ある！？初めて聞いたぞ、そんなの」

「えっ、みんな言ってるよ、拳君、ちっちゃくて、かわいいって」

、、なんだよ、そーいう意味かよ、そんなピカチュウやチョップパ
ー的な人気じゃなくて、公平みたいなエースやサスケ的な人気が欲
しのよ、オレは、、

それからしばらくしてやって来た担任の車で公平の家に向かった

今からおじちゃんの死に顔を見るかと思うと、実感がわかなかった
けど、暗い気持ちになった

なんか車でいつもの帰り道を通るのは違和感があった

車の中で、エンドレスで流れてるYAZAWAの曲がなんかうざかった

第三話

完

第4話 『おじちゃん』

公平の家に着くと、まだ通夜の準備中だった

公平は当然いつもより元気がなくて、くまだらけの目だったけど、精一杯の作り笑いでオレたちを出迎えた

公平の案内でウチに入ると、おばちゃんが忙しそうに動き回っていて、オレたちに気付くと頭だけ下げた

リビングの横の和室に棺が置いてあって、おじちゃんが寝かされている

オレはそっと座って、白装で横たわったおじちゃんを見ている

青白い顔をした人が、あの優しいおじちゃんと同じ人だとは思えなかった

オレの親父の時は行方不明だったから通夜も葬式もしなかった

こんなに人が死んだのを実感出来る物なんだな

小さい頃、ばあちゃんの葬式に出たらしいけど、全然覚えていないから、オレは白装束の人を見るのが初めてだった

おじちゃん

一緒に遊んでもらった記憶がよみがえる

何で、、、

何で自殺なんかしちゃったんだよ

涙が出そうになったけど、公平の気持ちを考えて必死にこらえた

そのまま10分位は座り込んでいたかな？

立ち上がって公平の顔をみると、弱弱しい顔をしてた

忙しそうなおばちゃんを少し手伝ったりしてると、一時間位で通夜が始って、少しずつ人がやって来た

担任と朝倉は線香をあげると先に帰ってった

帰りぎわ担任が

「鬼頭、虎谷を頼むぞ」
って言った

（拳、母さんと光輝を頼むぞ）

昔、親父に言われた言葉とだぶる

こんな時、子供になげんじゃねーよ

どうしたらいいのかわかんねーよ

でも、、、

大人でもわかんないのかもな、こーいう時は

涙ぐむおぼちゃんを励ましてると、公平が声をかけてきた

「拳、ちよつといいか、ゝ、ゝ」

二人で通夜を抜け出して近所の公園に向かった

ピリリピッピピー、オメデトウ、オメデトウ

途中のダイドーの自販機でけなしの金でコーヒーを2本買おうとしたら、こんな時に限って1本目で当たりがでやがった

なんか全然嬉しくなかった

公園に着いてベンチに腰を降ろした

「よくここでおじちゃんに遊んでもらったな」

「、、、、ああ」

公平にコーヒーを渡して、2人とも一口だけ飲むと、しばらく無言になった

ブランコでは小さい子達が楽しそうにはしゃいでいる

コーヒーをもう一口飲むと公平はゆっくり喋りだした

「なあ、拳、、、親父の死因聞いた？」

「、、、、自殺だったんだろ？担任がオレにだけ話してくれた」

「そっか、、、」

「きっと仕事で色々あったんだろ？」

「、、、、いや、そうじゃねーな、、、まー仕事も上手く行ってなかったんだろーけどな、ここ二、三年不況で大変そうだったし、きつと借金もあっただろうしな、でもそれが原因じゃねえ、、、ホントの原因は、、、、」

公平は遠くを見ながらそう言うのと、残ってたコーヒーを一気に飲むと缶を地面に叩きつけるように投げ捨てた

カラカラ

不快な音が鳴り響いく

子供達がびっくりした顔でこっちを見た

「多分、母ちゃんの浮気が原因なんだ」

はっ？

浮気？

「、、マジかよ、それ、、」

おじちゃんが死んだって聞いた時の数倍ショックだった

まさか、、

おばちゃんに限って、、

公平を見ると、血がでそうな位、唇を噛みしめていて、固く握った両拳には血管が浮いていて、プルプル震えてた

「公平、、いつから気付いてた？」

「、、、一年位前、ずっと気付いてないふりしてたんだけどな、それがいけなかったのかな？」

「公平、、、」

「だって！、、、だって！こんな事になるなんて思わねーもん！」

夕日に照らされた公平の瞳は光ってて、水滴がポタポタと拳に落ちた公平が泣いてんのは、幼稚園以来だった

きつと一年間すごく我慢してたんだろう

おじちゃんもおばちゃんもあんなに仲良さそうだったのに

「なあ、拳、俺はどうしたらよかったんだろうな？親父がいなくなつてこの先、母ちゃんとどうやっていったらいいんだろうな」

力のない声でつぶやく公平には、いつもの覇気がなかった

オレはやっぱ公平に何も言っただけであげられなかった

二人ともぼんやりと夕日を眺め、そのまま、しばらく時間が過ぎた

おじちゃん、、、

おじちゃん、行くよー

おっ、拳ちゃん、上手くなって来たなー

父さん、拳の相手ばっかしてないで、僕のシュートも見てよ

はいはい、公平そんなに焦るな

あーもう暗くなって来たな今日は、ここまでだ

えー

はは、二人とも来週またやろうな

うん、絶対だよ

そうだ、拳ちゃん今日のうちでご飯食べていきなさい

うん、ありがとうおじちゃん

ってか父さんがいない時、ほとんど毎日ウチで食べてるよ、拳がない日は僕が拳の家に食べに行ってるし

そうなのか、二人ともホントに兄弟みたいに仲が良いな

あー疲れた、母さん飯にしてくれ

はいはい、その前に3人とも泥だらけよ、お風呂入って来なさい

うん、おじちゃんの背中流してあげるよ

あつ、ずるいぞ拳、僕がやる

ボクだ

やだ、僕だ

こらこら二人ともケンカしない

拳ちゃん、公平、ちゃんと肩まで浸かって

うん、ねーおじちゃん、ボクと公平だけの秘密教えてあげようか？

あつ、拳、2人のだけの秘密って言ったら

えーいいじゃん、おじちゃんだったら

うーん、しょうがない、特別だよ

ははは、何かな？

ボクね、今度弟か妹が生まれるんだよ

そうか、拳ちゃんお兄ちゃんになるのか、よかったなー、拳ちゃん
だったら、きっと優しいいいお兄ちゃんになれるよ

「お兄ちゃんたち、、いけないんだよ」

小さな男の子の声で現実に戻る

「はい、ゴミはゴミ箱に捨てようね」

小さな手で空き缶を手渡してきた

「そっか、教えてくれてありがとうな」

公平は、空き缶を受け取ると男の子の頭をクシャッと撫でた

途中のゴミ箱に空き缶をすて、公平は通夜に戻って行った

もういつもの顔付きに戻っていた

一旦、ウチに帰り、チャリで光輝を迎えに行く

外は薄暗くて紫掛かった不思議な色の空をしてて、肌に触れるちよっとひんやりとした風が心地よかった

保育園に着くと、もう真っ暗で、いつもオレが着いたとたん、どことかけよって来る、光輝の姿がなかった

さすがに遅くなっちゃったか

まだ明かりが点いている教室に行ってみると、光輝と担任の先生だけだった

「あつ、お兄ちゃんお疲れ様」

オレが、遅くなった事を誤ると先生は、笑顔で許してくれた

光輝の担任のかすみ先生はめっちゃ優しくて、オレも好きだった

仕事終わってるのに、残ってもらってサーセン

「さっきまで兄ちゃんが来るまで起きてるって言ってたんだけどね」

光輝は戦隊ヒーローの人形を抱き締めながら寝てた

よっぽど楽しい夢でも見てんのか、光輝は笑顔で寝息をたてている

「んー、にいちゃん、くー」

寝言を聞いて、オレは先生と顔を合わせ、笑った

「光ちゃん休みがちだから、なかなか友達の輪に入れなくてね」

「こいつおとなしいし、人見知り激しいしな」

「でもお兄ちゃんの話をする時はすっごく生き生きしてるんだよ、うちの兄ちゃんはすごいんだって毎日言ってるんだから」

「ははは」

照れながら鼻の頭をかく

「ホントにお兄ちゃんのこと大好きなんだね、きつと光ちゃんにとつてゴーカイジャーよりもお兄ちゃんがヒーローなんだよ」

「ヒーローって、照れるからやめれって」

「へへ、顔真っ赤にしちゃって、お兄ちゃんかわいーな」

かすみ先生はいつもオレをからかう

「オレの事はいいよ、それより先生、この間合コンだったんだべ？
彼氏できたんか？」

話をそらすためかすみ先生をからかう

「えっ？あははー、あの、お兄ちゃん、だれに聞いたのかな？」

「へへ、ゆり子先生」

「もう、ゆりこのやつ、よけいなことを、、、エッヘン、もっとろんだメダメでした、とーぜんの如く」

ピースして、偉そうにいう先生

「いや、堂々とゆーなよ、かすみちゃん、もっとあせらねーと」

つーかこんなにいる人なのに、なんで男運ないのかな？

見てくれだって悪くないのに

乳デケーし

「ふんだ、私は仕事に生きるからいいもんねー」

小学生相手に舌を出している、篠原かすみ25才独身

うん、きっと大人は大変なんだな、なんか悲しくなって来た

「そろそろいくわ」

光輝を抱き抱え、自転車の荷台に乗せる

「んじゃー、先生お疲れ」

「あつ、ちよつといいかな?」

「ん?」

「光ちゃん、最近ちよつと咳がひどいから、気をつけてね」

「うん、、、わかった」

少し不安になり、光輝の顔を見る

大丈夫だよな、顔色も悪くないし

帰り道、ぼんやり考える

なあ先生、オレはヒーローなんかじゃねーよ

だってオレは弱いもん

幼馴染にビビッて、何を言われても何も言い返せない

落ちこんでいる親友に気の聞いた言葉もかけてやれない

機嫌が悪いときは、弟にあたりちらす

病弱な弟に優しくしてやることができない

情けないけど、それがオレなんだ

オレは公平じゃない、そんなに強くない

アパートに帰って、光輝をかかえてふとんに寝かせてから、母ちゃんがちらかした部屋をいつものように掃除する

まったく、たった一日でどうやったらここまで汚せんのか、教えて欲しい

シャワーをあびてから、ありあわせの材料で適当に、炒め物を作って食った

食欲はそんなになかったけど、給食をあんまり食べなかったせいか、思ったより食えた

食器を洗ったらやることがなかったから、暇をつぶすためなんとなくプレステのスイッチを入れた

国民的RPGのおなじみの明るい音楽が流れる

うちは貧乏だから、これは嫌がるクラスの古林君に強引に借りた物だ

オレの次に背の低い古林君は、その時半べそをかいてた、ご愁傷様

ちゃんと返すよ、多分

ちなみにうちに遊びに来た奈良が作った

けん LV20 戦士

こーへー LV20 戦士

なら LV19 戦士

すず LV20 戦士

というクレイジーな、超攻撃的パーティ

レベルあげに飽きてきて、次の大陸に進んで、とりあえず目に付い

た洞窟に入る

洞窟の奥まで進むと、ボスが出てきた

巨人型モンスター

最初は善戦していたけど、パーティの肝の、あの回復アイテムが切れた

ほらあの草だよ

巨人のとてもない攻撃力の前に、1人また1人と倒れていった

一分後

「けんたちはぜんめつした」って残念な表示

不吉な音楽が流れる

「ああけんよ、死んでしまうとは情けない」

神父さんに怒られた

ごめんなさい

まだ10時前で眠くなかったけど、やる気がうせてセーブして電源を切った

枕元に置いてあった借り物の忍者マンガを開き、パラパラと数ページめくったけど、すぐに閉じた

「もう読みあきたってばよ」

電気を消して、ふとんに寝そべる

月明かりが部屋の中を薄い青に照らしていた

今日は疲れた

かあちゃん

おじちゃん

公平

メガネデブ

おばちゃん

朝倉

鈴岡

転校生

光輝

かすみ先生

メガネデブ

いろんな人が頭に浮かぶ

ってか、奈良なんで二回も、、、

ほんとうにおじちゃん死んじゃったんだよな

そして公平とおばちゃんは、、、

「、、、ねむれねえな」

少し蒸し暑かったから扇風機のスイッチを入れた

カラカラとまぬけな音がする

「おんぼろが、、、」

窓に目をやると月がまぶしいくらいに光ってて、薄緑の空は不気味

な色だった

満月か

そういえばあの日も、こんなふうに明るい空だったな

二年前、まだ公平ん家の二軒隣に住んでいた頃

その晩オレは、寝つきが浅くてトイレに起きた

トイレをすまして部屋に戻ろうとした時、月の明るさに吸い込まれるように縁側に向かうと、親父がいた

「どうした拳、こんな時間に」

親父はめずらしく縁側で酒を飲んでいた

「なんか寝むれなくて」

親父は手招きしてオレを呼ぶと、膝の上に座らせ

「ずいぶん重くなったな」

笑顔でそういうとオレの頭をなでた

焼酎臭かったけど、膝の上はあったかくて居心地がよかった

しばらく親父の晩酌に付き合い、学校のこととか、サッカーの話をした

少し眠気がきて部屋に戻ろうとすると、親父はあらたまった顔をしていった

「お前が生まれた時は未熟児でな、ずいぶん心配したんだが、本当に大きくなったな」

「でもクラスで一番小さいよ、ボク」

「ははは、すぐに大きくなるさ、きっと」

そういうと、ぎゅっとオレを抱きしめた

とつぜんすぎて、びっくりした

「なあ、拳、男は強くないといけねえ、じゃないと大事なもんを守れねえ、強くなれよ」

オレは言葉を失っていたけど、親父は続けた

「拳、母さんと光輝を頼むぞ」

それからしばらくして、親父はいなくなった

昨日と同じ今日、今日と同じ明日が、ずっと続いて、オレは親父は当然のようにずっといるもんだと思ってた

親父がいなくなって初めてオレは、オレを取り巻く世界を自覚した
初めて冷静に世界を観察した

オレの世界、オレらの世界

それはどうしようもなく力に支配されていた

大人のいう勉強の出来る、出来ないってのは、たんに一つの要素に過ぎなかった

オレらの世界、ガキの世界では

スポーツが出来るってこと、クラスの人気があるってことの方が、勉強よりよっぽど重要だった

そして、何よりもケンカが強いつてことが一番大事な事だった

オレは小さくて弱かった

力がないやつは、力があるやつに嫌われたら、生きていけない

力のあるやつに守ってもらわないと、生きていけない

そんな当たり前の事を、それまでオレは全く気づかなかった

そのころからだんだん公平に引け目を感じてきたんだ

ゴホ、ゴホ

急に咳の音がしてビクツとする

寝返りを打って、光輝を見てみると、楽しそうに笑ってて、少し安心した

なあ親父、、、

オレは小さくて弱い

どうしようもなくわかってた

でも光輝の前では、強い兄貴でいたかった、かっこつけていたかった
親父が言ったように、光輝を守りたかったんだ

だから、、、

ウソをついた

強いふりをした

毎日、ケンカで勝った話をした

毎日、かっこいいオレを演じた

、、、オレのウソを光輝は全部信じた

病気のせいで友達と外で遊ぶことができなかった光輝は、人一倍強
さに対する憧れが強かったんだと思う

目をキラキラさせながら、オレの武勇伝を聞きたがった

オレはその場しのぎで毎日作り話をする

ウソをつくたび、オレはどんどん自分が嫌いになっていった

光輝の目をまともに見れなくなっていった

正直、オレは光輝があんまり好きじゃなくなっていた

光輝を保育園に迎えに行くために、サッカーを辞めた

光輝の病院代がかかるからうちは貧乏で、小遣いもろくにもらえなかった

光輝の面倒をみなきやいけないから、みんなが遊んでいる間も我慢しなきゃいけなかった

そのうちだんだん、光輝に辛く当たるようになっていた

でもホントは、光輝よりも、弱い自分のほうがずっとずっと嫌いだった

自分の弱さが光輝にばれるのが怖かったんだと思う

ごめんな光輝

オレは弱い

公平みたいに強くなりてえ

そしたらもっとお前に優しく出来るかな

おじちゃんの言葉を思い出す

拳ちゃんだったらきつと優しいいいお兄ちゃんになれるよ

カラカラと扇風機の間で抜けた音がする

なんか枕が馬鹿みたいに濡れていて気持ち悪かった

泣きながらやるせない気持ちを整理してたら、いつの間にか眠っていた

第4話 完

第5話 『廊下に立ってなさい』

「あっちいー」

朝日が眩しくて、いつもより早く目が覚めた

うわ、寝汗でパンツまでぐっしよりじゃん

あー、クーラー欲しい

シャワーあびてから冷蔵庫を開けたら、ガチでマヨネーズしかなかったから、仕方なくご飯にかけて食った

見た目はしょべーけど醤油かけるとうまいから、ホントに

一晚寝たら、気持ちがかなりすっきりしてた

それと、公平には悪りーけど、今日は迎えに行かないでいいんだっ
て思うとなんか気が楽だった

アパートを出ると、信じらんない位、空が青くて、雲一つなかった

くせで公平ん家を通って学校に行く

家の前で両手をあわせておじちゃんに祈った

途中のコンビニで鈴岡がファッション詩を立ち読みしながら待ってた

小学生のくせに、、コロコロコミックでも読めよ

「あれ？脂肪レンズいっしょじゃねーの」

「うさぎの餌やるために、担任に呼ばれて早く行っただろ」

奈良は顔に似合わず生き物係だった、ありえねえ

「あいつに任せたら食っちゃうんじゃない？もちウサギのほうな、餌のニンジンじゃなくて」

「ははは拳、相変わらず毒舌だな」

さらりとかわす鈴岡、だめだこいつは生半可なネタでは乗ってきやがらねえ、プチ天パは笑いに厳しい

昨日の、通夜の話とか、今日の葬式の話をしてたら学校に着いた

「サッカークラブだれが葬式行くの？」

「本多と鈴木と豊田かな、あーあと、松田先生も行くと思う」

ガラガラ

「そっか、何時からだっ、！？！ イッツ！」

ぶべっ！？

！？ なんてよ！？

教室のドアを開けた瞬間、人が飛んでくるなんて、まじないわ、ここ日本だよ

てかタイミング的にすっげー確率じゃね、コレ？

なんてことを考えながら、教室に目をやると、奈良が鼻血を出しながら、仁王立ちしてました

ちなみにふっ飛んできたのは、スーパ―取り巻きブラザーズの片割れ、悪代官のほう

「奈良、いってーよ！奈良！朝っぱらから人を飛ばしてくるなんて

ひどくない？あれか、あのマリオのあいつ、あれだハンマーブロスか、てめーは」

「あっはっは、オニケン、おはよう、あっはっは、そいつがなめたこと言うからついな、あっはっは」

「あっはっはじゃねー！貴様はそれでも生き物係か！ウサギさんに謝れ！」

「、、ウサギさんごめんなさい」

「よし、それでいい、んで、こいつ何やったのよ？」

オレらのやりとりを見て、数人の女子がツボってた

多分しばらくウサギってよばれる、いや明日くらいにはきっとウサビッチってあだ名が付いてる悪代官は泣いてました

かわいそうに、でも相方がまだ来てなくてよかったね

「いや公平がないからって、調子のとってっからついな、いや、悪気はあったんだよ、バリバリ、あっはっは」

あちゃー、悪代官もそこそ自信はあったんだろうけど、相手が悪かったね、その豚アホだけどマジでつえーから

鈴岡はあきれ顔で、ウサギ悪代官を介抱していた

さすが保健委員！感動した、君は神殿についたら僧侶に転職させよう

鼻血をふきながら、まわりのやつらに勝ち名乗りをあげているメタボリック柔道家、あのー、言いにくいんですけどチャック全開ですよ、奈良君

しばらくして担任が来て、朝倉がいつもより元気な声で号令を出した

朝礼が始まる前、朝倉に公平は多分大丈夫だって言ったら、急に顔が明るくなって、そのあと昨日みたいに顔真っ赤にした

いやー、分かりやすい

一時間目はオレのだいっ嫌いな算数で、昨日色々あって宿題忘れたオレは廊下に立たされた

ってかぶっちゃけいつも公平の写してるから存在自体忘れてた

担任は昨日の事わかってるから、あんまり怒らなかったけど

ってか今日は大目に見てくれればいいのに、さすが公務員、そういう所はしっかりしてるよね

廊下行きはオレともう一人、、、

つーかなんでこいつと一時間も一緒に立たなきゃいけねーんだよ？

なんか気まずいなあ

いつもオレと一緒に公平に写させてもらってる奈良は意外にも鈴岡に写させてもらってやがった、くそ、ありえねえ

5分位、黙ってつつ立ってたけど、一時間も無言でつつ立ってんのが耐えらんなくて勇気を出してそいつに話しかけて見た

「うちの担任今どきありえねえだろ？」

「、、、」

うわーシカトかよ、からみずれー

、、、って思った時、上から声が降ってきた

「まーな、まさか宿題忘れただけで立たされるとはな」

「、、え、ああ、えっとあれだ、担任のやろう、なぜか宿題と忘れ物には厳しいんだ、今の時代に教育委員会上等ってかんじ」

あー、びっくりした

自分から声かけたのにあせった、しっかし声まで太いんだな

おそるおそる上を見上げてみた

近くでみるとマジハンパねーわ

すっげー威圧感

太い腕

太い足

太い首

でも太ってるわけじゃねー

マジでけえ

ごつい

オレの視線がそいつの腰くらいだもの

「まー、気をつけた方がいいよ、遅刻したら男子は1時間正座させられるしな、このクラスは男子には担任が小学ん時のやり方でやるんだと、まじで死ぬぜ、いやもうしびれるとかいう次元じゃないね、終わっても立てないからね、マジで、」

「そっか大変だな、実は間違っって前の学校の時間割で来ちゃってよ、今日算数ねーと思ってたんだ」

「あっはっは、それやばくねえか、今日忘れ物だらけなんじゃね？
ほかのクラスから借りてきてやろうか？あっはっは」

奈良の変な笑い方がうつった、クソ

「いや、それが水曜日は、奇跡的に算数以外、全部一緒だよ、助かったわ」

「おお！すっげーな、それ超ラッキーじゃん」

あれ？、、なんだ普通にしゃべれてるじゃんオレ

「つてか、間違えたって担任に言えばよかったのに」

「うーん、その言い訳すんのってなんかださくねえか？」

「おおつ、かつこいいこというねー」

意外と会話が進んだ

「しかしでけーな、お前、マジで、オレチビだからよけいそう思うんかな？」

「ん、ああ、そうだな、、」

そいつはオレを見ると少し考えてから、ゆっくり言った

「まー、6年だったら俺よりでかいやつも1人位いるだろうし、1年だったらお前より小さいやつもいるだろうしな、そんな程度だろ、俺らの違いは、でけーかちいせーかなんて、別にたいしたことじゃねーと思う」

はは、なるほど

オレに気ー使って言ってんだろーけど、何か妙に納得した

ってか、見かけによらず、けっこういいやつなんじゃね？こいつ

それから少し、この学校の話をして、前の学校の話を聞いた

基本あんまりペチャクチャしゃべる方じゃなくて、オレがほとんど一方的にしゃべってたんだけど、適度にあいずちを打ちながら、オレが聞いたことには、しっかりと答えてくれて、話してて妙に心地よかった

「てか、昨日絡んで来た二人組み、うざかっただろ？」

「え？、ああ、あいつらか、まあな」

「きっと今日もちょっかい出されんぜ、昨日なんか悪巧みしてたしな」

「そっか、でもあんま気にしてねーから」

「ムカつかねーの？」

「うぜーけどな、転校生なんてそんなもんだろ、」

「なんか言われたら、言い返せよ、あいつら実はビビりだから、お前がおどせば何も言ってこなくなるよ、きつと」

「いや、いーよ、そういうのあんま好きじゃねーんだ、そのうち飽

きるだろ」

「そっか、まーもうすぐ公平戻ってくるだろうし、そしたらあいつら何も出来なくなるだろ」

「公平？ ああ、学級委員らしいな」

「ああ、オレの幼馴染なんだ、父ちゃんが交通事故で死んで休んでるけどな、来週には戻ってくると思う」

「父ちゃん死んじゃったのか、大変だな、そいつも」

「、、、、うん、今日葬式なんだ」

そのあとも一時間目が終わるまで話をした

ごつくて見た目はこえーけど、おとなしくて優しい奴だと思った

それが転校生、前田龍吾との初めての会話だった

チャイムが鳴って、外に出てきた担任が

「お前ら、もどっていいぞ、次からは気をつけろよ」

って笑顔で言った

教室に戻って奈良と鈴岡の所に行く

「鈴岡、ミンティアくれよ」

「おう、いいよ」

「なあオニケン、転校生と何話してたんだよ？」

奈良がきいてきた

「別に、普通の話、けっこういいやつだよ、あいつ、おとなしいし、なんかもめごととかあんま好きじゃないんだって」

「ふーん、人は見かけによらねえな」

奈良はそういうと転校生の顔を眺めていた

席にもどった転校生の前田は、次の授業の準備をしていた

朝の奈良とのやりとりを知らない、取り巻きの越後屋が嫌らしい顔で、悪代官の所に行く、まだ心のダメージが抜けてない感じのウサビッチだったけど、相棒にけしかけられて、転校生にちょっかいを出しに行った

前田はほとんど無表情で二人を無視していた

それが気に障るらしく、前田の机にすわり肩に手をかけながら挑発する悪者たち、特にウサギ野郎は、朝のイライラをぶつけるように積極的に絡んでた

それを見ておびえる隣の席の古林君、かわいそうに

ほとんどの男子が面白がって見ていたが、女子は不快そうな顔をしているやつと、半々位だった

なんかさすがに見てらんなくて、オレは止めようかなって思ったが、なぜか奈良がもう少し様子をみようといいやがるから、仕方なく見ていた

結局チャイムがなるまで、嫌がらせは続き、糞コンビは自分たちの席に戻っていった

二時間目の社会の間、チラッと後ろをみると前田と目が合った

前田が少し笑ったから、オレも笑顔で返した

いい顔で笑うな、こいつ

二時間目の休み、あいかわらず、いちゃもん付けに行く二人だった

が、前田が全然反応しないので、あきてきたのか、なんかぐだぐだだった

ウサギも越後屋もしらけた顔でなんとなく悪口をいってるだけだった
前田のいった様に、その内収まるだろう

女子を見ると、朝倉がほっとした顔をしてたから、なんかオレも安心して鈴岡に、今日の宿題を写させて貰うお願いをした

鈴岡がしぶしぶオッケーしてくれたその時、、、

バシーン!!!!!!!!!!

突然馬鹿でかい音がして、オレの背中に衝撃が走る

ガラガラッ!! ガシャーン!!

「いってー!!」

イスから倒れこむオレ

っちょ、何???

痛みに耐えながら振り返ると、いくつか机とイスが散乱してて、オ

レの上に人が乗っかってる

マジかよ、なんで人が飛んでくんのよ、マジくない？ここ日本人、ぐいいいお、も、い、てか、だれよ？

よく見てみると、当然のようにまたウサビッチだった

まったくよく飛ぶ奴だ

なんか刑事ドラマバりにドクドク鼻血が出てた

てか、やばくねーか？その量は

「おめえよ、お前」

「ああ、オニケンわりい」

弱弱しい声でそういつて、体をひきずりながら、オレの上をどくウサギ野郎だったけど、フラフラでむちゃくちゃ痛そうだった

周囲を見ると、みんなの視線が1箇所集まっていた

みんな目を丸くしていて、一言もしゃべってなかった

こいつがやったのか？

ふっとんで倒れた机やイスにあたって軽いケガをしたやつらがおびえた顔で前田をみていた

すっげえ

我慢できなくて殴ったのかな？

まー気持ちは分かるけどな

っーかここまでふっとぶもんかよ、、、

前田は立ち上がっていてしばらく少し下を見ながら、なんとも言えない悲しそうな顔をしてたけど、みんなに頭をさげると倒れた机を戻し始めた

みんな呆然と前田を見てた

その内朝倉がハッとした顔をして机を起こすのを手伝い始めて、それを見て何人かの女子も一緒に手伝った

ウサギ代官を見ると、また鈴岡が介抱していた

雑巾で鼻血で出来た池を拭く鈴岡

うわーこりゃひどい

てか鈴岡はホントにいい保健委員だな、奈良なんかつつたってるだけだぞ

いい回復役になりそうだ、はやく転職しないと

越後屋を見ると、青ざめた顔できよどつてた

無理もないか、一步間違えれば、鼻血の海作ってたのは自分だったんだから

まあこれでこいつらもこりただろ

ウサギさんと保健室に向かおうとする鈴岡が声をかけてきた

「あれ、拳、膝から血出てんじゃん」

血？あ、ホントだ

背中の中の痛みの方がひどくて気が付かなかった

「拳も一緒に保健室いくか？」

「うーん、たいしたことないからいいや、絆創膏だけもらってきて」

「わかった」

机を直し終わって、前田がみんなに頭を下げた

教室内の空気はすぐ元に戻った

このクラスは、けっこう頻繁に奈良が暴れまわってるから、みんなもめごとの順応性が高い

クラスが落ち着いても奈良は席に座らずぼーっと突っ立ってた

「どうしたよ、コレステロール伯爵、腹が減って動けないか？」

「、、、、、、見たか？」

「何を？」

「今の転校生だよ、、、、、、お前見てたか？」

珍しく真面目な顔で話しかけてきた

「見てねえよ、オレ後ろ向いてたし、したらウサビッチ、、じゃなくてえーと山下ふつとんできたし、前田が殴ったんだろ？すげーなあんなにぶっ飛ぶなんて」

「殴ってねえよ、あいつは、、、、」

「へ？じゃあ蹴ったんか？」

「いや、そうじゃねえ、あいつはただ押しただけだ」

「はぁ？何いってんだお前」

「いや、マジだって俺ずっと見てたもん」

「眼鏡くもってたんじゃねえの豚さん、押しただけで人があんなにぶっ飛ぶわけねーだろ」

「たたくまたデブの嘘が始まった、超能力じゃあるまいし」

「だからマジだって言ってるんだろ、俺だって自分の目で見ても信じられねーけどな、えーとだな」

「そういうと奈良は状況を説明しだした」

「まあ話し半分聞いておこう」

「あいつらのやりとり見てたんだけど、転校生がずっとシカトこいてたからなんかグダグダでよー、転校生全然びびってねえの」

「あつ、オレそこまで見てたわ」

「それで本人達もどうしていいか解らなくなっただろうな、なんか絡み方が昔のヤクザ映画みたいな訳のわからん事言い出してよ、ププッ、そんな時のあいつらの顔ときたら、あっはっは！」

「うわっ、汚ねえ、ツバ飛ばすんじゃないよ！」

「ああ、ドンマイドンマイ、でよし、やれエンコ詰めるだの、ドタマぶち抜いたるだの、事務所連れてくだの、ぶっそんな事言ってるだけど、もう周りの奴らツボりまくりでよ」

「あっはっは！どんな小学生だよ、そりゃツボるわ、2CHるわ、あっはっは」

くそ、完全に下品な笑い方がうつった

「で、隣の古林が笑ったのに逆上した、ウサギ、、、じゃなくて、えーと山下がキレて古林殴ろうとした時、転校生がかばうように押しのけてだな、、、」

そう言ってその時のしぐさを再現する奈良

「おい、ちょっと待て、押したただけならまだしも席に座ったままだったんか？」

「そうだよ、ありえねえけどな」

「お前、さすがにそれは話盛ってんだろ、普通に考えて」

「だからあいつは普通じゃねえんだって、ありゃバケモンだぜ、それも桁違いのな」

「そりゃあいつがすげえのはガタイ見ただけで解るけどよ」

「いや、お前はわかってねえよ、お前だけじゃなくてクラス全員な、解ってるのはぶっとばされた山下だけだろうな、とにかく俺は絶対

あいつとはかわりたくないね、勝つとか負けるとか以前の問題だわ」

奈良の言うとおり、オレは全然わかってなかった

ってか奈良の言うことを信じてなかった

鈴岡が戻ってきて絆創膏をもらう

「サンキュー、なあなあ、この銀縁メガネがね、転校生が座ったまま押しただけで悪代、、、、、じゃなくて、、、、山下があんなにぶっ飛んだって言うのよと思う」

「いや、そんな訳ねーじゃん、話盛りすぎだろ」

「ホントだって、俺見てたもん、えーと、、山下がこうやってな、
、、、」

また同じ説明をする奈良

鈴岡も信じてないみたいで聞き流した後、ぼそりと言った

「、、、、、、っていうかあいつ山下じゃなくて、山本なんだけどね、もう6月だぞ、そろそろ覚えてやれよお前ら、、、、」

顔を見合すオレと奈良

「あれだオニケン、、、、ウサギってかわいいよな」

「うん、かわいいよね」

そして、チャイムがなって席に戻った

奈良が言った事は嘘じゃなかった、、、

午後、オレ達は前田龍吾のすごさを目の当たりにすることになる

第5話完

第6話 『(特)』

三限目の休み時間と給食時間は別に何も起こらずに過ぎる

あつ四限目に奈良が授業中に居眠りして、担任のでかい定規の角で叩かれても起きなかった、sonだけ

昼休みは五限目が体育だから、体育服に着替えて校庭に出て遊んだ
そこで一悶着あつた

第6話

『(特)』

校庭に出たオレ達だったけど、サッカーゴールもバスケットリングも上級生に取られてた

「どーする、久々に野球でもする?」

鈴岡が聞いて来た

「この人数じゃ野球は無理だろ」

オレ達は全員で八人だった

やっぱ公平がいねーと人が集まらん

とりあえず野球グラウンドでキャッチボールをして時間をつぶした

奈良と組んでくだらねえノリで投げあう

「死ね！メジャーリーグボール！」

「何いー、これは肥える魔球！？重すぎて取れない！」

「何が肥える魔球だ、早く投げろや！チビ」

「いくぞ、スーパートルネード波ー！」

「何だと、球が小さくなっていく！？まさに外道ー！！見えない！こ

れが縮む魔球か」

「そんな訳あるかデブ、早く投げろや」

鈴岡が冷めた口調で突っ込む

「はー、お前ら最近、ギャグワンパターンだな、おもんないぞ、ボケ弱いし」

いつも温厚なくせ、笑いにはやたら厳しいモジャモジャ頭

「相変わらず厳しいな、スズ、じゃーてめえがやってみろよこの天パ」

奈良が鈴岡に絡むと自信たっぷりに言いはなった

「いいよ、拳受けてくれ」

すごい自信だな

面白いことをやれって言われてやるのは、流れの中でやるのの何倍

もむずかしい

いったい何をするつもりなんだ？

まさかいくぜ、豆タンなんて言うつもりじゃねーだろうな、そんなのゆとりにはわからんぞ

鈴岡は何回かボールを握り直すと振りかぶって叫びながら投げた

「ナイフ!!」

球はオレのそばまで来ると起動を変えてストーンと落ちた

当然のように取りこぼすオレ

こんなの取れるか！

ってかすげえ、ギャグがどうかじゃねーけど

「おい、フォークなんていつの間に覚えたんだよ」

「すっげえ落ちてたぜ」

みんな興奮してた

「ふふん、こんな事もあるかと練習してたんだよ」

どや顔の鈴岡

「どんなシュチュエーション想定してんだよ、てめーは、クッソー
負けた」

「ああ、いくらオレ達でも美食屋には勝てない」

うなだれるオレと奈良、完敗だ

鈴岡は何気に運動神経抜群で起用だった

「つてか鈴岡、お前こんなスゲーこと出来るのになんでレギュラー
なれねーの？」

「ううっ、だって俺公平と同じポジションだし、、、クソ、ディフエンダーに転向しようかな、、、」

鈴岡は1年からオレや公平と一緒に、サッカークラブに入ってたかなり上手かったのに、4年生になってもレギュラーになれずにいた

まーそれだけ公平がすげーって事なんだけど、ってかピッチャーに転向した方がいいんじゃない、、、

そんなテキトーなノリでキャッチボールしてたんだけど、いつまでたってもメンバーが集まんなかった

他のクラスのやつらでも誘おうかなーって思ってたたら、大人数でこっちに向かってくる奴らがいた

うわっ、10人以上いるよ

「お前ら野球やんねーんだったらどっか行けや」

えらっそうにしゃべりかけてくるリーダー格のゴリラ顔

6年生のグループだ

「俺らが先に取ってんですから、野球したかったら俺らより早く来て取ればいいじゃないすか」

鈴岡が淡々と言った

正論だ、すごく

「ああ？それぽっちの人数で調子乗ってんじゃねーぞ、コラ」

えらっそうに凄みを効かせてくるゴリラ男

相手はオレらの倍の人数で、午前中のダメコンビとは違って結構迫力がある

奈良と鈴岡以外はびびってちじみあがっていた

「公平がいる時は何も言ってこねーのに今日はやけにからんできますね」

奈良がそう言うと、一気に顔が真っ赤になるゴリラマン

「、、お前らの大将の親父死んだったそうだな、あんな調子乗ってっとお前らもやっちゃまうぞ！」

おじちゃんを引き合いに出されて、ブチ切れそうになるオレを鈴岡がなだめた

奈良が適当に対応した

「やるって何をですか？俺ら馬鹿だからよく分かりませんわ、まーでもよく分からんけど気を付けますわ、よく分かんないすけど」

「ちっ、可愛くねえガキ共だ、おい行くぞ」

そう言っ取り巻きを連れて引き揚げていくゴリラ星人

「何しに来たんだ？」

鈴岡がボソツと言った

「ってかあいつらが野球やってるとこなんか見たことねーよ」

奈良がボソツと言った

たしかに、ただ公平がない間にエラそうにしたかっただけだろうなあ
あのゴリラもそれなりのガタイで強そうだったけど、奈良はもつとでかい、そして相当強い

公平がないって言ってもケンカ売ってくる根性はないようだった
どうせ公平が戻ってきたら何も言ってこなくなるだろう

この時はそう思ってた、、、、

その後は、校庭に出てきた同じ学年の何人かと一緒に三角ベースや
って昼休みをすごした

掃除時間、ぜってーだれもこないプール用具置き場でいつものよう
にサボる

毎週水曜日恒例の流れ

担任も水曜だけは体育のためジャージに着替えるから見回りに来ない

こういう時のオレらは鉄の団結力があつた

絶対だれも口わんねーの

チャイムがなって校庭に集まる

お、向こうから担任がやって来る

あれ？ジャージ変えたか？短パン？

って思つてよく見てみると、あれ？違う、、、ウソ！

前田か！

オレ達のとデザインの違う体育服を着て前田龍吾がやって来る

そっか、、、まだこの学校の体育服もってないんか

しかしでけえ、遠目には大人にしか見えねえ

みんなの視線が前田に集まる

そうこうしてる内に担任がやってきた

運動場の真ん中に身長順に整列する

当然のごとく1番前のオレ

当然のごとく1番後ろの前田

後ろを振り返ると前田の顔がきれいに見えた

おいおい、奈良より頭1個分はデケーじゃん

「今日は、この前の授業で全員逆上がりが出来たから、男女別でドッジボールをする」

担任が言うと、男子はみんな喜んでた

わーい、ドッジボールだー

準備運動の号令を恥ずかしそうに朝倉が出す

途中で2回順番を間違えてた、ドンマイ

身長順で2列に並び替えてそのままそれがチーム分けになった

オレのチームは

オレ ワダケン 越後屋 もと奈良の取り巻きで今は公平の取り
巻きAとBとC 公平の次に成績の良い松下君 そして前田龍吾

の8人

相手チームは

奈良 鈴岡 オレの次に背の小さい古林君 野球クラブの山田と淀
橋 バスケクラブの小島とウサビッチ

の7人

うーん戦力が大分偏ってるな

チーム分けが終わると奈良が声をかけてきた

「おい、オニケン明日の給食のデザート賭けようぜ」

「やだよ、どうみてもそっちのチームの方が上じゃん」

「そっちのが人数多いし、お前が、がんばればいいじゃん、それとも何か、自信がないんか」

「ああん、オレの避けテク知ってんだろ、わかったよ受けよう倍プツシュだ」

奈良の安い挑発に乗って2日分のデザートを賭けるオレ

あらためて冷静に戦力を分析してみる

あくまでオレの主観によると、、、

味方チーム

1 オレ 避けるのは多分一番上手い 球技はそこそこ出来る 身長低いから当たりづらい

2 ワダケン 鉄道マニア 問題外

3 越後屋 戦力外

4 もと奈良の取り巻きで今は公平の取り巻きA 普通

5 奈良巻きB（なげーから奈良巻きでいいやもう） こいつもまあまあ

6 奈良巻きC こいつは微妙、、残念賞

7 公平の次に成績の良い松下君 これは勉強じゃない、、、、ハア

8 転校生 前田龍吾 未知数、でも巨体はドッジボールには向かないと思う

相手チーム

1 奈良 デブのくせに球技得意 死ね

2 鈴岡 フォークが投げられる美食ハンター 下手な訳がない

3 古林君 うん、怪我しないでね

4 ウサビッチ 無駄にバスケットクラブ 無駄に球技得意、無駄に足は早い 無駄に強敵

5 バスケクラブ小島 ウサギよりかなりバスケが上手い かなり強敵

6 野球クラブ山田 ホームラン王 強敵

7 野球クラブ淀橋 地味だけど強敵 どうでもいいけど実家がカ

メラ屋

ってか、無理ゲーだろこれ

こっちオレと奈良巻きAB以外全然ダメじゃん

向こう古林君以外みんな体育会系じゃん

前田はどれぐらい出来るか分からんけど、あんでだけでかかったらマト状態だろ

ってか、もし公平がこっちにいたとしてもきびしいぞこれ

絶望的な戦力差の中プリンとゼリーを賭けた勝負が始まった

全員内野からスタートで、顔面と足は当たったことにはならない、ノーバウンドのみOK

後はアドリブっていう適当なルール

ジャンプボールは前田と奈良

身長差をいかして、あっさりと前田が取った、よし

ってか、はなから諦めてジャンプすらしめないデブ

負けるとは微塵にも思っていないボンレスハムの余裕の表情がむかつく

前田はとりあえず味方にパスした

奈良巻きCが相手チーム唯一の弱点、草食動物古林君を狙う

ナイス判断！

が、ポテポテのボール

それを古林君は必死に避けてるつもりなんだろうけど、自分から当たりに行つてんじゃないのって位見事にヒットした

痛がる古林君、可愛いそーに、、

これで8ー6

相手コートに落ちたボールを奈良が拾う

ワダケンを狙う

ひるむワダケン

と見せかけて、バスケットクラブ小島にパス

ほっとするワダケン

でも小島が投げて、やっぱりワダケン死亡、乙

7-6

奈良巻きCが拾ってBにパス

デブに下剋上の一撃！

奈良の右手に当たって弾くボール、ざまあー

って思ったけどそのまま鈴岡にキャッチされる

そのまま前に出てた奈良巻きCはカウンターでやられた

6-6

くっそー、天パ野郎、

しかもボールは相手コートに転がってそのまま鈴岡がボールを取った

ガリ勉の松下君を狙うと見せかけてオレを狙ってきた鈴岡

やべっ！

腹の当たりに飛んで来たボールをギリギリの所で膝で蹴り上げる！

セーフ！

と、思ったら上空に舞って落ちてきたボールを、よせばいいのに取ろうとする松下君

ああ、、、

完全にフラグがたっていた

当然のように松下君がボールを弾く

弾いたボールが都合よく越後屋の体に当たって地面に転がった

おいおい、コントですかあんたら、、、

ダブルヒット

4ー6、、、

転げまわって爆笑してる脂肪ダルマ、あーむかつく

その後、奈良巻きAが頑張って何とか野球クラブの山田を打ち取った

でもその勢いでバスケットクラブの小島を狙って返り討ちにあった

さらに奈良巻きBが頑張って何とか野球クラブの淀橋を打ち取った

でもその勢いでバスケットクラブの小島を狙って返り討ちにあった

バスケットマン小島恐るべし！

これで2ー4

さらに相手ボール

厳しいな、おい、、、

内野に残ってるのは

こっちはオレと前田

相手チームはデブとウサビッチ、こいつらはともかくバスケットクラブ
小島とサッカークラブ鈴岡のコンビがやべえ

ってか鈴岡サッカーよりドッジボールの方が上手いんじゃない？

小島が外野にパスする

外野が鈴岡にパス

狙いは明確だった

転校生ってのと、その巨体の迫力でここまで何となく狙いずらかつ
た前田

完全に前田狙いだった

クッソー、奈良の指示だな、、

オレ一人残していたぶるつもりか

何度か外野とのパスを繰り返しながら、前田の反応が遅れたのを狙って鈴岡が背中向いてる前田を狙った

うわ！だめだこれは絶対避けられねえ、当たるわ

って思った瞬間ボールがぐにやってまがって地面に落ちた

奈良が鈴岡を責める

「スズ！てめー何やってんだよ！チャンスだったじゃねえか」

「わりい、なんかつい癖でカーブかけちゃった」

、、、、鈴岡が器用すぎて助かった、ラッキー

「お前今の当てらんねーってどーなってんだよ、ってかどんな癖だよ？バカ！」

「だから、わりーって」

バシ

「いてっ」

バシ

「いてっ」

奈良と鈴岡が揉めてる隙にあっさりと二人を仕留めるオレ

いやラッキー

「てめー、チビきたねーぞ、コラ、こっち話してんじゃねーか」

吠えてくる脂肪風船

「汚くねーだろ、常識的に、ルール上問題ねーだろ、常識的に」

これで2ー2、相手ボール

オレと前田とバスケットコンビの対決

これならいける

オレが避け続けてチャンスを待つて持久戦に持ち込めば何とか勝て
そうだ

相手チームの作戦は変わらず前田狙いだな、、、と思ったオレが

甘かった

バスケットマン小島にパスを要求する外野の奈良

奈良がボールを受け取る

すぐに距離を取るオレと前田

内野にパスをしようとした奈良の動きが止まった

「わりい、目にゴミが入った、ちょっと待ってくれ」

そう言ってメガネをはずして左目をかく奈良

ちっ、早くしろよデブ

「とにかくオレが避けまくって粘るから、何とかボール取れたらウサギ、、、じゃなくて山本から狙ってくれ」

「おう、わかった」

前田と作戦を練るオレ

「お前の身長だったらこぼれ球とか拾える機会多い、！いてっ！」

コロコロと転がるボール

ゲラゲラと笑い転げる奈良

「あっはっは、チビ早く外野いけよ、あっはっは」

うっそ、オレ死んだの？

「てめー、デブきたねーぞ、コラ」

「頭脳プレイって言えば、策士なんだよオレは、ルール上問題ねー
だろ、常識的に、あっはっは」

完全に諸葛亮きどりの豚魔人

「くっそー、サイテーだお前！死ね！」

しかたなく転がったボールを拾って前田に渡す

前田がしゃがみこんでボールを受け取る

その時オレは信じられないものを目撃した

「残念だったな、負けたらごめんな」

そう言った前田の首筋から体操服のタグが見えた

なんか見慣れない表記だったから気になって目を凝らしてよく見て
みる

えーと

SIZE 前田(特)

MED E I N J A P A N

さいずまえだとか？

え？

(特) って何？

特注の特、、かな？、、、、はは

ってかサイズ前田って何？

マジ？

やっべえ、これ、マジやべえ

茫然としながら外野にむかった

あれだろ、ほら特注ってことは小学生用の体育服のサイズが入らなかったってことだろ

S、M、L、前田って事だろ

お客様サイズの方はいかがなさいますか？
今でしたらキャンペーン中ですので前田サイズが大変お買い得となっております

あ、じゃあ前田でお願いいたします

W W W W (^ ^)

すげえ、、、

まーでも勝負は多分負けだな

もし前田がウサギの山下をか討ち取っても多分相手ボールになる

そしたら多分外野とのパスの連携でスラムダンク小島か鈴岡が今度こそ仕留めるはずだ

さすがに球技じゃ前田も小島には敵わないだろうしな

バシーン

そう思ってたら豪速球で小島が打ち取られてた

うわっ、めっちゃはえーじゃん

みんな驚いていた

すつげえ球、ありゃ取れねえわ

打ち取られた小島が一番驚いてた

とんでもないパワーだな

これで1対1 相手ボール

ウサギ代官山下と転校生前田龍吾の一騎打ちになった

当然のように外野にパスするバスケウサギ

パスを受け取る小島

距離を取る前田

一旦、内野に回す

また距離を取る前田

外野の鈴岡にパスするウサギさん

何回かこの流れが繰り返された

ああ、くっそー

前田のあの威力がありやもう一回ボールが回れば勝てそうなのに
無理だなこりゃ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5151r/>

ナックル 最強の小学生(仮)

2011年5月22日10時37分発行